

鷺草の栽培について

池田 錦七

1. 鷺草は、真夏の暑い盛りに、涼を添える日本野生蘭で、その姿が白鷺が双翼を広げて、大空に舞い上るのに似ているので、その名に由来します。

鷺草や 中から一羽 立ってゆく

素道



本州、九州、四国と我国独得の植物で、湿地性の日当りの良い場所に自生し、かつては、東京にも野草として見られ、福井の敦賀地方にも夏の風物として賞玩せられましたが、土地開発の波に洗われ、今は絶滅しました。

私達は、敦賀に鷺草保存会を作り、5年前より増殖して、又、自然にかえそうと努力しています。鷺草作りは、むずかしいといわれ、大抵1年でなくしてしまうが、性質を知れば、こんな作りやすい植物はありません。

要は「日当り」、「風とおし」、「水気」さえあれば何処でもよく、ただし、過剰の肥料は球根をくさらせてなくします。

自生の青葉の外、園芸品種の白い覆輪、銀覆輪や、黄色い覆輪等多くあり、又、産地により、早生咲、中生咲、晩生と咲く花の時期を異にし、7月初旬より10月まで長い観賞期間があります。

§ 栽培法

(1) 植付け

作り方は、山草家だけが出来て、一般に困難と思われるが、日々の愛情と条件され揃えば、簡単に誰でも出来ます。

鉢植えと露地栽培では鉢作りが、最も容易であります。

鉢は深からず浅からず、3~4cmの浅鉢がよく底に穴のあるものが適し、水盤は不適當です。余り浅いと暑中根やけをおこし又、水盤は水ごけをくさらすこととなります。

植付け時期が一番大切で、3月上旬~下旬までで、球根の発芽直前がよく、大事な芽をかきおとした球根は駄目になります。

越冬した球根を丁寧に植土(みずごけ)と分け、更に、粒を大・中・小と三大別し、その区別

により鉢植をします。

植付けは、鉢穴を網目等でふさぎ、良質の水苔が一番無難なので、あらかじめ水につけてから軽くしぼり、2cmの厚さに平らにかたくしきつめます。

毎年春に、新しい水苔で植えかえることが大切で、これは無菌で通気性があり、保湿性に富み、有機質も含んでいて、弱酸性なので病気の心配もなく、サギソウの成育にとって、よく適しております。

水苔を敷きつめた上に、球根を4～5cmの間隔に一球ずつ、とがった方を上に向けて、並べる。その上に約1cm～2cmの厚さに水苔を覆って、軽く押し詰めて、十分に灌水し、凹凸のないように短い水苔を補充してならします。

鉢の周囲から水苔が乾いてとぶことがあるので、周辺は細かいのをよく、おし込んでおく事が大切です。

(ロ) 管理

日当りの良い場所なら、庭がなくとも屋上、ベランダ、窓辺で育てられますが、泥のはねあがりを嫌うので、庭ならば棚の上におけばよく、午前中、日が当り、午後から日陰になる置き場が望ましくて、夜露にあてることと風通しが大切です、室内では虚弱な、ひょろひょろ草となります。朝晩、充分じょうろ等で、水を鉢底から流れるようにやり、水を切らさない事が大切であるが、水盤等に植えて、常に湿っていることはよくない。日中の高温時の灌水は、根がむれて腐ります。

やがて、青葉が出て成育をつづけますが、6～7月頃花蕾が見える様になると、急に伸び出してくるから、この頃、ハイポネックスを1000倍に薄めた液を、2～3回施肥することが一番無難です。油かすの腐汁を薄めてやる人もありますが、少し濃いと球根をくさらし、又、他の濃厚肥料は絶体禁物です。又、高温、通気不良、乾燥、日焼などが原因でウイルス性病気、葉にくぼみが出来、病斑が現われたり、ねじれたりして生育がとまったり、濃い肥料を施したりすると、細菌性病気で葉裏から黒くしぶが出る。

この様に、管理をおこたると病気の原因となるので、ダイセン1000倍液等を5～6月頃の梅雨時にかけて、予防することも必要であります。

やがて丹精こめた鷺草が、7月頃ぼつぼつ咲き始めますと、室内や半日陰におくと花持ちがよく、鷺の飛ぶ姿が室内でも、みられるようになり、暑さに涼を呼ぶ候となります。

(ハ) 花後の手入

花は1週間ぐらいで褐色に枯れていくので、直に摘みとると第二の花が咲き始め、自生は1～2輪ですが、肥培したものは更に多く、5輪位は咲きます。

結実すると球根の生育が悪くなる。花後は、水やりを段々減らし、秋にすっかり葉が黄変したら、日陰に取りこみ、越冬の準備に入ります。

球根をえりわけて、水苔にくるみ、ポリ袋に入れて保存するより、鉢ごと土中に埋めて鉢をかぶせたり、鉢をむしろで覆って、こけが乾かない様にする等ありますが、敦賀地方では、その

まま雪の下においても、充分越冬することが分りました。

要は、植えた後はそのままの状態、生育、開花、越冬と管理に心掛ければ、翌春の植えかえには、球根は約2～3倍にふえ、小豆粒の大きさになっています。

以上、要点をまとめると

- (イ) 水を切らさない。
- (ロ) 日光にあて、風通しをよくする。
- (ハ) 濃厚肥料を与えぬこと。

等に気を付けて栽培すれば、立派に花をつけ、又、球根も殖えて行きます。

51年1月25日

1 生育概要

2月	1月	10~11月	8月	7~8月	7月	6月	5月	4月	4月	3月	2~3月	月	
中~下	下	下~上	中~下	下~上	上~中	上~下	中~下	中~下	上~中	上~下	(下旬~上旬)	旬	
鉢を掘り出して選球する。	鉢ごと土中に埋める。乾燥を嫌う。零下三~四度まで耐える。	葉は黄変し、休眠期に入る。	新球肥大。根は長く伸びる。二~三本つく。	開花期	花蕾がみえだす。	地下茎伸びはじめ。花芽できはじめる。	葉三~四枚になる。花茎伸長はじまる。	葉三~四枚になる。根盛に伸びる。	芽が地上部に伸びだす。	芽の下から太い根が二~三本でる。	休眠からさめ芽が伸びだす。(葉三~四枚分化)	植付け	生育状況
<p>乾湿の差がはげしいと球根が腐る。</p> <p>30度以上では弱る寒冷紗やスターレで日中の強光を防ぎ風通しのよい場所におく。</p> <p>花後の管理が悪いとウイルス病がつく。</p> <p>発病が多くなる時期 病害虫の防除のポイントとなる時期</p> <p>充分に日光に当てる。</p> <p>3月いっぱいにはヨシズ、わらなどを被せて防寒する。</p> <p>施肥期</p> <p>花の咲かない発病株はぬきとる。</p>													
												管 理	

嶺南地区の

モリアオガエルについて

池田 鋪七

毎年六月頃の梅雨時には、北は岩手の松尾村白沼、伊豆天城の八丁池、京都の鞍馬山等地域指定の天然記念物として、テレビに新聞に報道され、樹上に産卵するので名高い。

無尾目アカガエル科に属し、青緑色、暗褐色又は、緑地に褐色の斑点等、多様な体色をもち、雄は七、五センチ 雌はやや大きい。